

なごや 文化情報

2022

Winter

No. 400

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／ハートフィールドギャラリー

随想／日本舞踊工藤流四世家元 工藤倉鍵さん

この人と…／日仏シャンソン協会 日本支局長

カフェ・コンセール・エルム 代表 加藤修滋さん

視点／なごや文化情報創刊400号の軌跡と今後の展望

#zoom up／俳優・演出家 おぐりまさこさん



2022

Winter

表紙

GIRLS' WAR

～カ・イ・カ・ン カテゴリー on the TATAMI ground～(部分)
(2019年/ [ブロンズ彫刻のサイズ] H42cm×W43cm×D30cm/ブロンズほか)
於・商家「駒屋」(豊橋市・愛知)

「GIRLS' WAR」をテーマに金属鑄造作品を制作しています。臭い蓋を開けるような、水を差すような、そんな作品であるといい。



はら あゆみ
原 歩

1996年 愛知教育大学総合造形コース金工教室卒業
1998年 愛知教育大学大学院美術教育立体造形専攻修了
2014年～ 主にグループ展にて作品発表
2015年～ ギャラリーRIEN(幸田町・愛知)企画・運営

ギャラリーRIENウェブサイト <https://rien-kota.jimdofree.com>

Contents

- Pick Up Gallery ハートフィールドギャラリー…………… 2
- 随想 復活の狼煙
日本舞踊工藤流四世家元 工藤倉鍵さん…………… 3
- この人と…
日仏シャンソン協会 日本支局長
カフェ・コンセール・エルム 代表 加藤修滋さん…………… 4
- 視点 なごや文化情報創刊400号の軌跡と今後の展望… 8
- #zoom up 俳優・演出家 おぐりまさこさん……………10

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

Pick Up Gallery



加藤恵利展 断片からの創造2021 (2021年10月)

ハートフィールドギャラリー

ハートフィールドギャラリーは1991年にオープンしました。現代美術の発表が盛んに行われていた時期に、憧れを持って通っていた空間には、作家の熱気がいつも満ち溢れていました。10坪ほどの空間で何ができるか。自身の感性に素直な作品を制作する人達に自由さを感じて、その活動を追っていきました。以来、30年が経ち、展覧会を重ねていった人達が作家になっていきました。私は3年前に体調を崩し、半年間ギャラリー運営に携われなかったのですが、作家自ら指揮を執り、一時の空白も生じさせることなく展覧会を開催し続けてくれました。作家は育てるのではなく育つ。揺るぎない絆を得て、これからも生きた美術を発信していけると確信しています。

設立 1991年 オーナー 園部知江子
住所 〒460-0008 名古屋市中区栄5-4-33
えいわビル1F
電話 052-251-5007

取り扱い作家 内田恭子、加藤恵利、白水口コ、中谷ゆうこ
判治佐江子、別所洋輝、森田朋、水谷一子 ほか
ウェブサイト <http://heartfieldgallery.com/>

随想

復活の狼煙



日本舞踊工藤流四世家元

く どう くら かぎ
工藤倉鍵

日本舞踊家。2013年より続く「やっとかめ文化祭」に連続出演。愛知芸術文化協会（ANET）理事。
（公社）日本舞踊協会会員。名古屋日本舞踊協会幹事。CBCクラブ会員。

「先生、しばらく稽古をお休みします」。

これで何人目だろう。自宅兼本部の稽古場が開店休業状態になってしまった。

「県外にお住まいの先生は、県をまたぐ移動を自粛してください」と、とある県のカルチャーセンターの担当者。さらに県内の出稽古場も、ことごとく休講せざるを得なくなった。2020年5月のことだった。前代未聞だと騒ぐ私に父が、工藤流の歴史上、稽古が全くできなくなったのは、太平洋戦争以来だと教えてくれた。まさに戦時のような危機的状況。一番ショックだったのは、長年に渡って工藤流に尽してくださった師範の廃業が4社中もあったこと。中には「まあ、稽古場やめますわ。踊りなんかやっとならなくていいでしょう!」と、電話一本でさよならを告げてこられた師範も。

政府の持続化給付金などを申請し、なんとかその場を凌いできた。だが、稽古ができない。これは本当に大変なこと。結局、予定していた2020年7月の第五十回工藤會ゆかたおどり、8月の第百六回工藤會が延期に。私どもが存続するために必要なのは発表会を開催することだが、稽古ができなかったことに加え、生徒の皆さんの協力で当たり前できていた発表会が開けないことに、心身が疲弊するのを痛感した。父も2021年5月、行く末を案じながら亡くなった。

そんな折、文化庁や各自治体から、ウェブを用いて

配信する新たな企画を募集し、アーティストを補助する事業を行うというニュースが発表された。

ちょっと待って！ ネット配信ができる規模やスキルのあるアーティストはよくても、それが出来ない人は？ そもそも配信を観ることが出来ない人は？

文化芸術の担い手の多くは、町の子どもたちにピアノやバレエ、習字や絵画などを教え、小さな発表会を開く先生であったり、ご高齢の方に日本舞踊や、民謡などを教えている師匠なので、ネット配信ができる方々ばかりではない。

また、コンサートや美術展、発表会などに足を運ぶ方々の多くは習い手や指導者として、同じ空間と時間を共有し、直接文化芸術に触れる喜びを知る人達である。

大変な状況が起きて一年半以上が過ぎ、コロナ禍がなかなか収まらない中ではあるが、コンサートの開催なども増えてはきている。とはいえ、利用制限と緩和を繰り返す劇場。一向に戻ってこない生徒。文化行政の方々にまずは、人が安心して文化芸術に親しめる環境の大切さを認識してもらい、習い手が安心して教室へ戻ってくることでできるアイデアやサポートを、困っている先生達に提案していただきたい。そうした後押しがあればこそ、町の先生達も大いに勇気づけられ、前へ進むことができるはず。いたるところから文化芸術の復活の狼煙が上がるのを見ることができると思う。

この人と...



日仏シャンソン協会 日本支局長
カフェ・コンセール・エルム 代表

かとう しゅうじ
加藤 修滋さん

シャンソン界の巨匠シャルル・アズナブール（2018年逝去）、タンゴ界の革命児アストル・ピアソラ（1992年逝去）。この二人を友とし、恩人として交流してきた人が名古屋にいる。千種区吹上でシャンソニエ（シャンソンを専門にするライブハウス）「カフェ・コンセール・エルム」を運営する加藤修滋さん（1949年8月26日生まれ、名古屋市出身）だ。2013年7月、ナゴヤキャッスル天守の間で開催された「日仏シャンソン協会並びにカフェ・コンセール・エルム設立25周年記念祝賀会」を取材した私は、居並ぶ来賓、プログラムに祝辞を寄せた海外ミュージシャンの顔ぶれに度肝を抜かれた。政治家でも、大企業の経営者でもない加藤さんに、どうしてこれほどの人脈、人望があるのだろう…。その答は「情熱とアイデア、そして不屈の精神」だった。（聞き手：上野茂）

アズナブール、ピアソラとも熱い交流

「いきなりシャルルとアストルですか（苦笑）。二人は私の音楽人生の宝物です。ともに音楽の本質を教えてくれた師であり、私の活動を応援してくれた恩人です。シャルルとの出会い



⑤ フランス人歌手との交流で盛り上がるエルム
⑥ アズナブールに寄り添う加藤さん

は1989年、パリで開催したエルム所属歌手の初公演でした。その折に、私が手掛けたシャルルの歌の日本語訳詞を『法定訳詞』として認めてくれました。

彼は私の母（加藤ハツさん、2014年逝去）とも意気投合し、母を『日本のシャンソンの母』と呼んでくれるようになりました。最後の日本公演（東京、大阪）になった2018年9月、シャルルは私を楽屋に呼び、自宅の庭で採取したオリーブオイル1缶をプレゼントしてくれました。重症筋無力症を患う私への心遣いでした」

— お話をうかがうだけで胸が熱くなります。で、ピアソラとの交流は？

「私がタンゴ楽団『タンゴ・デ・ラ・エスペランサ』のピアニストとして活動中だった1988年、来日したアストルとの交流会が実現しました。彼は私たちの演奏を称賛し、帰国後激励のメッセージを送ってくれました。シャルルとアストルは互いに面識はないのですが、アストルがシャルルについて語った称賛の言葉を、2004年パリで公演中だったシャルルに伝えました。その時の彼の満足そうな笑顔は忘れられません」

— すごい！ 加藤さんは世界的ミュージシャンの橋渡しをされたわけですね。ところで「タンゴ・デ・ラ・エスペランサ」

mss会館を訪れたピアソラ[Ⓔ]と加藤さん母子

アルゼンチンのテレビ局で番組出演中の「タンゴ・デ・ラ・エスペランサ」



の話が出ましたが…。

「順を追って私の音楽歴をお話しましょう。スタートは向陽高校合唱部、そして愛知県立大学合唱団へと続き、4年生の時にアストル・ピアソラに熱中し『タンゴ・デ・ラ・エスペランサ』を結成。並行して当時知り合った様々な音楽仲間と『軽音楽の集いmss』を立ち上げました。ちなみにmssはミュージック・サロン・オン・サタデーの頭文字で、その活動が『mss会館』建設へとつながるわけです」

「mss会館」建築そして「エルム」開設へ

——若いアマチュア・ミュージシャンたちが、自分たちの活動の場を設ける。つまり自前のホールを持つという発想がすごいですね。資料によれば「mss会館」は1980年8月に、総工費約2700万円を掛け建設され、開館時にはマスコミが大々的に取り上げ、全国の音楽ファンの注目を集めました。

「土地と資金の3分の1を母が負担、残る3分の1を銀行から借り入れ、残りの3分の1は、多くの人に関心を持ってもらうことが必要だと考え音楽愛好家から出資を募りました。今で言うクラウドファンディングですね。おかげでmss会館は『借金コンクリートで出来ている』と揶揄されました（苦笑）」

——完成したmss会館には地元の舞台人だけでなく、多数の有名アーティストが来演したそうですが…。

「ロック歌舞伎のスーパー座、劇団クセック名古屋、日舞やフラメンコの稽古や公演にも使用されましたが、何よりmssはミュージシャンのためのステージでした。幾度も来演してくれた菅原洋一さんは『知りたくないの』などのヒット曲ではなく、大好きなタンゴを歌いました。アルゼンチンのグラシエラ・スサーナは日本でブームを巻き起こした『サバの女王』ではなく、母国のタンゴやフォルクローレを歌いました。自身の音楽を追求できる場として、シリオラ・チンケッティやロス・インディ

オス・タクナウ、ジャクリーヌ・ダノら海外のアーティストにも好評でした」

——そして1988年には駐車場だったmss会館1階に、シャンソニエ「カフェ・コンセール・エルム」が開設されました。

「開館直後は菅原洋一さんのタンゴ、瀬間千恵さん、嵯峨美子さんらのシャンソン、奥則夫さんらのカンツォーネ、ロス・インディオスのラテンと、様々なジャンルのアーティストが出演してくれました。何よりエルムの支えとなったのは美輪明宏さんでした。美輪さんは1980年のmss会館誕生時から2008年までエルムへの出演を続け、専属歌手の育成に力を貸してくださいました」

活発化するパリとのシャンソン交流

——間もなく「エルム」はフランスでも知られるライブハウスになるわけですが、成功の秘けつは？

「スサーナの来日が激減したことで、アルゼンチンとの交流よりも、フランスとの結びつきが強くなりました。パリのライブハウスとの姉妹提携や、1989年からスタートしたエルム所属歌手によるフランス公演、そしてフランスの国営テレビで放映されたアズナプールの特番で『理想のシャンソン空間』としてエルムが紹介されたことでしょうか。またエルムの歌手がパリで受け入れられた理由は、フランス人が好感を持つ歌唱法を身に付けていたこと。現在フランスで歌われている新しいシャンソンを積極的にレパートリーに取り入れていること、そして独自の詞ではなく、基本的に原著作者が認めた法定訳詞でライブを行っていることだと聞いています」

——フランスとの音楽交流について、もう少し詳しく聞かせてください。

「1989年、シャンソンの本場で腕を磨こうと、3人のエルム専属歌手とピアニストの私で、初のパリ公演を行いました。会



④開館当初の「mss会館」 ⑤名古屋市音楽プラザでの「プロムナード・コンサート」



25周年記念祝賀会で歌う菅原洋一さん



場はシャンソン歌手モーリス・ファン（1991年逝去）が経営するライブハウス『ル・コネッターブル』でした。以来、エルムとル・コネッターブルは姉妹提携を結び、フランス公演の折には必ず同ハウスで公演するまでになりました。そんな交流が続くうち、1991年に『日仏文化交流功労賞』、94年には『フランス芸術文化勲章シュヴァリエ』をいただくことになり、それがきっかけになり『日仏シャンソン協会』日本支局長に推薦されました。パリでの公演は母が亡くなる2014年まで24年間継続することができました。余談になりますが、フランスで接する音楽関係者に、『日本のシャンソンの母=ママKATO』と呼ばれ、最も慕われたのが母でした」

「エルム」を襲った未曾有の困難

——2013年、日仏シャンソン協会とエルムの25周年祝賀会が盛大に開催されました。ハツさん、修滋さんによって築かれ

た人脈の豊かさに驚きました。しかし残念なことに、その祝賀会で感動的な挨拶をされたハツさんが、翌14年、92歳で逝去されました。さらに15年にはパリで大規模なテロが勃発。そして19年には新型コロナウイルス感染症が世界を襲いました。加藤さんはミュージシャンとして、これらの苦難に不屈の精神で立ち向かいました。そのいくつかをご紹介します。

「母の豊かな人脈は、教員で植物学者でもあった祖父（加



「エルム公演」の看板を出したパリ・ヨーロッパ劇場の前で



「名古屋巴里祭」のプログラム



再生された2階「クリスタルスタジオ」

藤新市さん)譲りなんです。母は祖父に学び、その豊かな人脈と、教員生活で得た退職金を、私とエルムのために費やしてくれました。母は『平和でなければ文化は育たない』と反戦を訴え続け、『音楽は国境と言葉を超えて人の心と心を結ぶ』とエルムの運営に心血を注ぎました。パリ同時多発テロが起きた時、私は難病とされる重症筋無力症を発症し、救急病院のベッドに横たわっている状態でした。百数十人の犠牲者の中には、有名なシャンソン歌手、アンヌ・シルベストルの孫がいたのです。私は居ても立ってもいられず犠牲者追悼歌『哀しみのバタ克蘭』を書き上げ、募金活動を開始しました。毎月1回、金山の名古屋市音楽プラザで開催していた『プロムナード・コンサート』を『平和希求コンサート』として開催し、エルムで『平和希求ライブ』を行うようになりました」

——試練はさらに続きました。新型コロナウイルス感染症です。ライブハウスがその元凶^{げんきょう}のように言われました。しかし加藤さんは不屈の精神とアイデアで様々な形のライブを展開。後継者の長男・加藤祐滋さん(43歳)、長女・浦山綾音さん(38歳)とともに未曾有の危機に立ち向かいました。

「mss会館2階のホールを動画配信のできる『クリスタル・スタジオ』に改装し、映像を交えた新企画を始動。1階のエルムでは観客2人だけの『シャンソンの応接室』、観客を8人

に限定した『心のワクチン=それはシャンソン』といった過疎ライブ^{ライブ}を提案。歌を聴くだけでなく、観客と出演者が語り合う場として、予想以上の好評をいただきました。唯一残念なことは、2005年の愛知万博以来毎月行ってきた『プロムナード・コンサート』の継続を断念したことです」

父・子で第50回「名古屋巴里祭」開催へ

——昨年9月14、15日、恒例の「名古屋巴里祭」が日本特殊陶業市民会館ビレッジホールで行われました。新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下の開催とあって入場者は大幅に制限されましたが、2日間、3公演のプログラムは新旧アーティストの競演もあり見応え、聴き応えたっぷり。エルムの底力を見た思いでした。

「1972年に『シャンソン・フェスティバル』の名で第1回を開催して以来、フランスからシャンソン大使を迎え、『シャンソン都市・名古屋』の象徴として連続開催してきた『名古屋巴里祭』ですが、コロナによる観客制限、大幅な収入減から昨年の開催は難しいと考えていました。ところが、吉報が届きました。文化庁から『コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動』と認められ支援金を受けることができたのです。おかげでトリオ・ロス・ペバス、菅原洋一、瀬間千恵、さらに若手ヴィジュアル系シンガー-Kaya^{カヤ}を客演に迎え、充実した公演を実現することができました。その『名古屋巴里祭』は、今年いよいよ第50回を迎えます」

——今から公演が楽しみです。ところで加藤さんのご体調はいかがでしょう。インタビューの最後に、今後のエルム、シャンソンについて展望をお聞かせください。

「実は今回の名古屋巴里祭の構成は息子の祐滋が行いました。演出も私と二人三脚で行いました。舞台スタッフも感心するような台本を祐滋が作ったこと、親ばかりではありませんが、称賛したいと思います。さらにゲスト歌手の伴奏をした『エスカルゴ』の見事な演奏、観客ばかりがゲスト歌手をもうならせた桑原伸二のライティング…。収穫の多い『名古屋巴里祭』でありました。私の体調は良かったり、悪かったり。累積した赤字を返済するまでは生き延びなければなりません(苦笑)。私にはシャンソンというワクチンがあります。まだまだ頑張りますよ」

なごや文化情報 創刊400号の軌跡と今後の展望

～1984年の創刊から37年を経て
400号を迎えた情報誌の今後を考える～

文化芸術全般で名古屋地域の活動に特化した唯一の定期刊行情報誌である「なごや文化情報」が創刊400号を迎えた。1984年4月の創刊号には、当時の本山政雄名古屋市長から「昨今では様々な情報誌が巷間にあふれているようでございますが、その殆んどは巨大なマスメディアによって一方的に提供される情報であり、文化創造の原点と言われる人と人との交流が感じられません。その意味でこの月刊誌(当時)には、名古屋の現在の文化状況をふまえたうえで、21世紀に向けて発展させるためのエネルギーと、沙龙的な雰囲気と、手づくりの味が期待できるのではないですか」との祝辞が寄せられた。

これまで発行を続けてきたなごや文化情報について、たびたびご登場いただきご縁も深い、名古屋演劇界の顔・天野鎮雄さんにお話を伺いつつ、その意義を再認識し、将来を展望したい。

(まとめ：杵屋六春)



創刊100号記念では、表紙を並べて掲載した
(1992年8月号)

なごや文化情報

現在、なごや文化情報は年4回発行、フルカラーA4サイズで12ページとなっている。掲載内容は、文芸、美術、演劇、舞踊、音楽、伝統芸能の6ジャンルの専門家による編集委員会で検討している。誌面の構成は、様々な作家の美術作品を

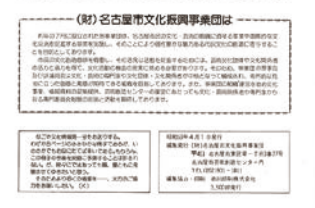
紹介する表紙に始まり、市内のギャラリーを紹介する「Pick Up Gallery」、名古屋地域の文化芸術関係者のエッセイである「随想」、編集委員が名古屋地域の文化芸術関係者取材して紹介する「この人と…」、「#zoom up」、及び編集委員がその時々の特ピックスを紹介する「視点」となっている。発行部数は毎号8,000部、図書館や文化小劇場、美術館といった名古屋市の公共施設をはじめ、近郊のホールなどに配架されているほか、事業団ウェブサイトでも326号以降のバックナンバーを読むことができる。これまでに取り上げてきた文化芸術関係者数は570人にのぼり、時代を彩る方々に誌面にご登場いただいていた。サイズは当初のB5サイズから125号以後はA4サイズに、創刊号から349号までは月刊、397号までは隔月刊、そして現在は季刊となっている。

過去の記念号記事などを振り返る

創刊号は1983年に開館した名古屋市芸術創造センターの開館記念公演「フィガロの結婚」実施報告や、名古屋市文化振興事業団の初代亀山巖理事長による文化振興のための提言などが掲載されている。亀山理事長は「文化というものの自体、行政がどのように援助しようとも、市民が動かねば芽を出すことも育ちもしない。いい替えるならば名古屋の文化を形成するのは市民の中にあるのだと信じるからである」と



創刊号の表紙は版画家の須田敏夫さんが手掛けた市の木と花であるクスノキとユリの版画であった(1984年4月号)



創刊号に掲載された
亀山理事長(当時)の提言



300号に掲載した誌上座談会(2009年3月号)

記している。芸どころと謳われる一方で文化不毛の地とも揶揄される名古屋で、文化芸術をしっかりと発信していこうとする市民の熱意により事業団が生まれ、なごや文化情報が創刊されたことがうかがえる。

創刊100号記念誌には作家の桑原恭子さんや教育学者の堀内守さんから辛口ながらも、よりよい誌面づくりに向けた応援記事が寄せられている。創刊15年を迎えた180号では、大規模な読者アンケートを実施するとともに、児童文学者のしかたしんさんや、洋画家の丹羽和子さんといった地元文化芸術関係者による、なごや文化情報の展望を語る座談会が掲載された。創刊300号でも芥川賞を受賞した諏訪哲史さん、著述家の岡本信也さんを交えた座談会を開き、なごや文化情報や亀山理事長の功績を振り返っている。これまでのなごや文化情報バックナンバーは名古屋芸術創造センター資料室や、ナディアパーク7階の文化情報ひろばで読むことができるので、関心のある方は是非ご一読いただきたい。

演劇人として名古屋の文化芸術をけん引してきた天野鎮雄さんに聞く

一創刊号に掲載された「フィガロの結婚」にも主演され、なごや文化情報ともご縁も深い天野さんですが、天野さんとなごや文化情報の関わりは?

「創刊号から、名古屋が日本の文化芸術発信地になれるよう期待を込めて、協力してきました。『随想』では名古屋の大学に演劇科をつくりたいとの想い、『この人と…』では私が立ち上げた劇団の劇座についてや、名古屋を演劇で生活ができ



19号に掲載した天野さんのエッセイ(1985年10月号)

る街にしたいという夢を語りました。残念ながら、現在もなかなか実現することが難しいものばかりです」

一今後のなごや文化情報に期待することは?

「なごや文化情報の趣旨とは違うかもしれませんが、私は演劇人なので、ニューヨーク、ロンドンなど演劇の盛んな国々の最新情報や旬な俳優を名古屋にも紹介してほしいと思います。また私も載った『この人と…』のように、人に焦点を当てる記事も面白いけど、既に知った顔の人の記事ばかり(笑)。まだ知られていなくても、あっと驚かせるような才能のある人を発掘して紹介して欲しい。また小中高生の関心をひく記事をお願いしたい。未来の文化芸術を担う人材を増やすきっかけになるのも大きな役割だと思います」



195~196号(2000年6~7月号)では、天野さんのこれまでの演劇人生について紹介している



「マッピングDEシェイクスピア The Tempest」(2021年10月)に主演した天野さん

なごや文化情報の意義と将来展望

公共施設などで気軽に入手できるなごや文化情報だが、今後は紙媒体だけではなく、ウェブサイトを活用した発信にも注力し、幅広い年齢層の読者に親しまれるようにしたい。未だ広く知られていないながらも活躍中の人に焦点を当てるなど、アーティストの魅力を引き出す誌面にしていきたい。また、これまでの名古屋の文化芸術を知る貴重なアーカイブとして活用することも意義と考えている。

情報発信の強化と内容のさらなる充実が、なごや文化情報の発行に携わる者の課題であることを肝に銘じたい。

#zoom up

ズーム・アップ

俳優・演出家

おぐりまさこさん

名古屋市民芸術祭2016
特別賞 / TGR2018優秀賞
(札幌) / 2018年30GP俳優
賞(大阪) / 2021年30GP優
勝(大阪)など、名古屋を飛
び出し全国各地で大活躍の
おぐりまさこさん。2021年
には名古屋市文化振興事業
団が、名古屋地域の演劇の
振興に貢献のあった女性演
劇関係者に贈る第1回名古屋
女性演劇賞も受賞されました。



演劇ユニット「空宙空地」の代表として、俳優、演出家だけでなく、プロデューサーとしても多彩に活躍するおぐりさんにお話を伺いました。
(聞き手：吉田明子)

やりたいことへの挑戦と演劇とのめぐり逢い

—演劇を始められたのは遅かったとのことですが、そのきっかけは？

「実際に演技に携わるようになったのは30歳過ぎです。私は名古屋市守山区の生まれで、4歳の時に同じ区内のすぐ近くに引っ越して、現在もその家に住んでいます。子どもの頃は映画やドラマが好きで、中学2年生の時に俳優になりたいと母に打ち明けたところ、鼻で笑われてしまいました。自分が演じることで何かを表現したいという思いだけはずっと持ち続けていました。高校生の時は日本大学の映画学科に進みたかったのですが、父親を亡くし、経済的に厳しかったことと、一人っ子のため、母親を一人名古屋に置いておくのは忍びないということを言い訳にして諦めてしまいました。

その後、地元企業に勤め、29歳で同僚だった夫と結婚し、退職しました。ちょうどその時期に脳のすぐ下に神経鞘腫という腫瘍ができました。ずっと首が痛くて、次第に手も痺れ、うまく歯も磨けず、コンタクトレンズを外すこともできなくなり、



幼い頃のおぐりさん

さらに温度も感じることができなくなりました。いくつもの病院で診てもらっても原因がわからず、ようやく31歳の時に病名が判明し、すぐさま手術を受けました。もう少し手術が遅れていたら命が無かったかもしれません。術後、集中治療室で目を覚ましたら、それまで何も感じられなかった感覚が戻っていて、肌に風を感じたんです。

この体験をきっかけに、これまでいろいろな言い訳をして諦めてきたのは、人のせいにして逃げていただけだと思い、夫と母に『一度だけ挑戦させてほしい』と頼み込み、タレント事務所に入りました。

周りは年下の先輩ばかりでしたが、『名古屋でおばあちゃん役と言えば、おぐり』と言われるようになりたいと頑張っていたら、少しずつCMやドラマの仕事がもらえるようになりました」

—そして、演劇とめぐり逢います。

「偶然、現場で一緒になったタレント事務所の先輩に『芝居に出るから』と誘われ、観に行きました。演劇はあまり好きではなかったのですが、先輩に誘われたので断れずに。それが『よこしまプロッコリー』という劇団でした。虚構を感じさせない自然な会話劇に夢中になり、『舞台上に立てなくても制作の仕事だけでも良いから！』と頼み込んで入れてもらいました。『人より10年遅れているので頑張らないと』と一生懸命でした。ようやく主役をやれるようになった時、母が倒れました。入退院を繰り返す状況の母を看病しつつ、演劇を続けていくことは難しく、やむなく退団しました」

「空宙空地」の活動と「敷居は低く、クオリティは高く」

—それでは、「空宙空地」について教えてください。

「退団後、名古屋で活躍している劇作家・演出家の刈馬カオスさんから誘いをいただき、『恋愛耐湿』という舞台に出演して、やはり演劇は面白いと思いました。しかし劇団に属しながら、母の看病を両立させるのは無理だと思い、2013年に自分ひとりの演劇ユニット『空宙空地』を立ち上げました。

最初の企画は、以前から一緒に舞台をつくりたいと思っていて関戸哲也さんとSの字×空宙空地共同企画『空中のエス』(作・演出／関戸哲也)を上演しました。第1回本公演は、2014年『零年ーディア・アルジャーノンに花束を』(脚色・演出／おぐりまさこ)他短編3作品。お客さんにたくさん来てもらえて、いけるかなって手応えを感じました。2015年に関戸さんが加わって二人のユニットとなり、会話劇を中心に幅広いスタイルの上演・企画を続けています。

ちなみにユニット名の『空宙空地』の由来は、子どもの頃



Sの字×空宙空地共同企画「空中のエス」(2013年)

から住んでいる家の隣の空き地です。私、そこがすごく好きで、学校から帰るといつもそこで一人で遊んでいました。その大好きだった空き地が、ある日突然売りに出されて、宅地になってしまいました。その時、『この土地を切り取って、空宙に浮かばせておけたら、いつでも遊びに行けるのに』と思いました。空宙に浮かんだ空き地。嫌なことがあってもひと時忘れ、無邪気に遊べて、私にもこんな楽しいところがあったんだと思えるような空間。お芝居を観に来てくれたお客さんにとって、そんなひと時になったら良いなと思って名付けました」

—ここ数年、名古屋だけではなく全国で活躍されていますね。

「2015年に制作した『如水』が、翌2016年、最強の一人芝居フェスティバル『INDEPENDENT:3rd season selection JAPAN TOUR』に抜擢され、ツアー7都市の中の6都市で公演が決まり、大きな反響を得て全国的な活動に繋がりました。

ここ数年は全国各地の様々な企画に参加し、毎月本番がある状態です。お客さんがお客さんと呼んでくれて、札幌公演は満席となりました。地方にも応援してくれる人達がいてくれますし、地方公演に名古屋からお客さんが駆けつけてくれて、本当に感謝しています」



東京、仙台はじめ6都市で上演した「如水」(2016年)

—おぐりさんは一人芝居に多く出演され、また、公演のプロデュースもされていますね。

「一人芝居は、たった一人で最後までお客さんを惹きつける力が求められます。山田百次さんという青森県出身の俳優の一人芝居に圧倒され、魅了されたのがきっかけです。お客さんがずっと自分を見つめているから、嘘がつけないしごまかせない。俳優としての地力を上げてくれたのが一人芝居です。

『空宙空地』の本公演は、関戸さんが作・演出する作品を私がプロデュースしています。一人でも多くの人に観てもらいたいし、お客さんに喜んでもらうのが一番嬉しいです。どうしたらお客さんも自分たちも楽しいか、企画を考えるのが好きです。

できる限り関戸さんがやりたいことを高いクオリティで実現したいので、客演・スタッフ費などの経費が高み、助成金がないと成立しません。特にこのコロナ禍で、本公演の資金に充てようと思っていた収益を見込めるイベントもほぼすべて出来なくて、活動資金集めに苦心しています。でも、チケ

ット代は値上げしたくない。特に高校生以下と22歳以下はそれぞれかなり安価に設定しています。若い人に観てもらいたいし、より多くの人に来てもらいたい。『敷居は低く、クオリティは高く』がモットーです。観終わった後、来てよかったと思ってもらえる作品を届けたい。

小売業で仕事をしていたので、クレームを言ってくれる人を大切にすることを学びました。人の気持ち、この人が本当にしてほしいことは何か。私は30歳を過ぎてこの世界に入り、遠回りをしましたが、社会生活をしてきたのも無駄ではなかったと思っています」



「たりない二人」30GP優勝(2021年)

今後の活動への意欲

—これからの計画などを教えてください。

「2021年12月29日～31日にG/pitで短編集『トシノセイ』を上演します。また、2023年に空宙空地立ち上げ10周年を迎えるので、ダンサーや振付家、殺陣師など、いろんなジャンルの人を巻き込んだ企画を準備しています。

これまでに、札幌、仙台、東京、長野、三重、福岡、沖縄には、作品を持って行きましたが、それ以外の都市でもやりたい。演劇を観る裾野を広げたいんです。コロナが収束すれば、いろんなところから名古屋に観に来てほしいし、また各地の公演を名古屋から観に行ってもらいたい。演劇がもっともっと盛んになってほしいと思っています」



名古屋女性演劇賞授賞式(2021年)

—札幌の劇団に客演するため、2021年10月末から約1ヶ月札幌に滞在し、戻ったら年末公演の準備。まさにスケジュールぎっしりのおぐりさんですが、他にも若手育成のプロデュースにも力を入れるなど、そのパワフルさに脱帽です。これからもご活躍を期待しています。



わたしの寄附で、土を耕す。 わたしの寄附が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ
名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内 **名古屋市文化基金** **検索**



「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、メールフォーム、FAXまたは郵送にて2022年2月10日(木)【必着】までにお送りください。ご回答いただいた方の中から抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼントいたします。

※当選の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

【宛て先】
〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階
(公財)名古屋市文化振興事業団 なごや文化情報アンケート係
FAX: 052-249-9386

- 内容についてどう思われますか。
①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない
- 「なごや文化情報」の中で感心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)
①表紙 ②Pick Up Gallery ③随想 ④この人と... ⑤視点 ⑥#zoom up
⑦1年をふりかえって(3・4月号のみ掲載)
- 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
- 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題やコーナーがありましたら、ご記入ください。
- ご回答いただいた方の
①お名前 ②年代(30代など) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号

メールフォームで簡単回答! アクセスはQRコードから



頼もしい味方をお探しですか?



駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。
20Hz ← → 20kHz

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

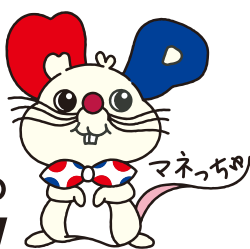
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL: (052)508-5095 FAX: (052)508-5097 Web: www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。



- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

E-mail: mane-pro@mane-pro.com